大石芳野とコソボ紛争

三　浦　雅　弘

Ⅰ．大石芳野、ドキュメンタリー・フォトグラファー

大石芳野の印象的な処女作、『来ればよいのだ春などは』（深夜叢書社、1973年）は、彼女が大学の写真学科を卒えて20代後半の頃、まず雑誌媒体に発表され、その2年後に単行本として刊行された[1)]。浅間山麓を舞台にひとりのモデルを追った、ある種の情念が溢れる「表現」を目指したその作風は、しかし以後それ以上に展開されることはなかったようだ。

大石はその第二作、『愛しのニューギニア』（学習研究社、1978年）以降、今日に至るまで、アウシュビッツ、731石井部隊、沖縄戦、広島、長崎、ベトナム、カンボジア等々の、過酷な現実を「記録」する現地取材を精力的に続行し、同世代では本橋成一（1940-）や広河隆一（1943-）と並ぶ日本を代表するドキュメンタリー写真家と目されている。その間、『無告の民―カンボジアの証言』（岩波書店、1981年）および『夜と霧は今』（用美社、1988年）に対してそれぞれに日本写真協会年度賞が授与され、『ベトナム凛と』（講談社、2000年）には土門拳賞が授与されている。

大石はある対談で、弾丸が実際に飛び交っているさなかよりも、終戦後の光景の方が戦争とは何であるのかをより明らかに示している、と述べている[2)]。その認識に沿うように、大石の戦地取材から生み出される作品群は、女性や老人、そして何より子どもを被写体としたものが多い。被写体の子どもが、レンズの向こうに見ている大石芳野という写真家の存在は得てして希薄化しているが、厳しい日々を過ごしているはずの子どもが、ときにはレンズ越しの大石に柔らかい笑顔を見せていることがある。それは写真家の励ましに応えようとするかのように、未来に希望をもとうとする子どもの精一杯の努力なのかもしれない。

大石芳野は1999年春から2000年秋までの1年半にコソボを5回訪れた。かつてのユーゴスラヴィア連邦南部に位置し、連邦崩壊後はセルビア共和国の一自治州であったコソボは、その住民の9割がアルバニア人であった。セルビア人による「コソボ奪回」が宣言された1989年を機として、その地は紛争の場と化して行く。'98年3月、セルビア人武装勢力（軍、警察、民兵から成る。以下「セルビア勢力」と記す）によるスケンデライ地区ブレスカ村襲撃を契機に、コソボ解放戦線（KLA）とセルビア勢力との内戦が爆発的に拡大し、'99年3月、北大西洋条約機構（NATO）軍によるセルビア空爆が開始される[3)]。大石がコソボに足を踏み入れたとき、コソボ全土の民家は半分以上が破壊され[4)]、その地に居住していた70万人以上のアルバニア人が難民化して、その半数がマケドニアに移動していた[5)]。

小論の目的は、コソボのアルバニア人たちを襲った悲劇を写し留めようとした大石芳野の仕事を考えようとするものである。大石の残した写真記録は、『コソボ　破壊の果てに』（講談社、2002年）と『コソボ　絶望の淵から明日へ』（岩波書店、2004年）の二巻に主に収められている。前者の写真集には‘Ethnic Cleansing in Kosovo’、すなわち、「コソボにおける民族浄化」という英語の書名も印刷されている。「民族浄化」と聞い

て、ナチス・ドイツによるユダヤ人のホロコーストを思い起こさないことは難しい。しかしその「民族浄化」が、肯定的に語られることも多い「民族自決（self-determination）」という理念と裏合わせの概念である可能性も考慮されねばならないだろう。

当時の大石らの仕事に対して、一抹の疑念を抱いたジャーナリストもあったようだ[6]。それはおそらく、コソボの被害の記録が、NATO軍によるセルビア空爆の正当性を後押しするものとして利用されかねないことを危惧してのものだったのだろう。その後の通信や撮影機材のデジタル化の急速な進展によって、その種の危険性は確かに増大しているといえよう。

Ⅱ．ユーゴスラヴィアの分裂

（1）第二次大戦後からチトーの死去まで

第二次世界大戦後の1946年1月に制定されたユーゴスラヴィア連邦人民共和国（いわゆる「第二のユーゴ」）憲法により、ユーゴには6つの共和国が誕生した。そのうち、セルビア、スロヴェニア、モンテネグロ、マケドニア、クロアチアの5つは、人口が過半数を越える民族の名称を共和国名に採用したのに対して、そのような民族がなく、セルビア人、クロアチア人、ムスリム人が混住していたボスニア・ヘルツェゴビナのみは、地域名を共和国の名称に採用した[7]。戦後間もなく始まった米国とソヴィエト連邦との対立を軸とする「東西冷戦」期に、チトーの率いる新生ユーゴスラヴィアは、労働者による自主管理社会主義を掲げて、東西いずれの陣営にも属さず、政治的にも外交的にも非同盟中立政策を貫いた[8]。遡って、第一次世界大戦後の1918年に建国された「第一のユーゴ」は、その統治機構を基本的には以前のセルビア王国のそれに負っていた。その当時、かつての王国的な中央集権制度に反抗を示していたのはほぼクロアチアのみで、スロヴェニア、モンテネグロ、マケドニア、そして、アルバニア人やボスニア・ヘルツェゴビナのムスリム人は、強く抵抗することはなかった[9]。

「第二のユーゴ」期において、多数派のセルビアが優位だったのは、柴宣弘によればせいぜい1960年代半ばまでのことであった[10]。1974年1月に制定された戦後4番目の憲法施行後は、「第二のユーゴ」は6つの共和国と2つの自治州（ボイボディナおよびコソボ）が事実上同等の権限をもつ「緩い連邦制」とでもいうべきものになっていた。民族間と地域間の火種は絶えることはなかったものの、終身大統領のチトーが1980年に87歳で生涯を閉じたときも、その体制は何とか存続を維持していた。

（2）チトー以後

ベルリンに始まる「東西の壁崩壊」の前夜に当たる1980年代後半、スロヴェニアは他の共和国に増して欧州指向を強めていた。おりしも1989年、コソボを訪れていたセルビア共和国幹部会議長ミロシェビッチは、セルビア人集会においてコソボ奪回を謳い、コソボからのアルバニア人追放を宣言する[11]。スロヴェニアはミロシェビッチの率いるセルビアとの対抗上、コソボのアルバニア人支持を表明する[12]。翌'90年の選挙戦で旧共産党系政党が勝利したのは、セルビアとモンテネグロのみであった[13]。

「第二のユーゴ」の解体が明らかな姿形を見せ始めたのは、いくつもの共和国の内部で少数民族が「独立」を宣言するに至ったときだった[14]。セルビア共和国内のコソボ自治州のアルバニア人が、「コソボ共和国」の最初の独立宣言を発したのは1990年7月である。クロアチア共和国内のセルビア人による「クライナ・セルビア人共和国」が、独立を目指して蜂起したのは同年の8月だった。さらに'92年の2月には、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国内のセルビア人が、「ボスニア・ヘルツェゴビナ・セルビア人共和国」の独立を主張する。

第二次大戦後の「6つの共和国」体制が終焉を

告げたのは1991年である[15]。その年の6月にスロヴェニアとクロアチアが独立宣言を発表する。翌'92年には欧州共同体（EC）が両国を承認し、両国と'91年10月にムスリム人主導の下で独立宣言を発したボスニア・ヘルツェゴビナも合わせて、国際連合（以下、「国連」と略記する）への加盟が認められた。'91年11月にはマケドニアも独立を宣言する。

ボスニア・ヘルツェゴビナに混住するセルビア人、クロアチア人、ムスリム人の間に憎悪の感情を煽り立てたのが、それぞれの民族主義的な政治指導者たちであったことはいうまでもない。しかしそれと並んで、ユーゴ外部の勢力によるマス・メディアを利用したプロパガンダが大きかったことも事実である。1991年秋以降のEC内では、セルビアと連携する英・仏と、クロアチアと連携する独・伊・墺との対立が目立つようになっていたが、それは第一次世界大戦以降の伝統的な対立図式でもあった[16]。柴宣弘によれば、セルビアおよびミロシェビッチの「悪」のイメージを喚起するのに力が大きかったのは、クロアチアとバチカンのカトリック勢力だったという[17]。大石も、後年のコソボ紛争において、NATO軍によるセルビア空爆後、それまで険悪だったギリシャとマケドニアがセルビアに同情を示したのは、セルビア正教もマケドニア正教も、ロシア正教と並んでギリシャの東方正教由来だからではないか、と宗教的要素の介在を推測している[18]。'92年4月、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国において、ボスニア・ヘルツェゴビナ・セルビア人共和国軍とムスリム人による郷土防衛隊との間に内戦が生ずる。内戦は時を置かずクロアチア人をも巻き込んで、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争（Bosnian war）と呼ばれるものに拡大する。このとき、セルビア勢力がボスニア・ヘルツェゴビナに実際に侵攻したという事実はなかったにもかかわらず、セルビアの侵略意図が喧伝され、国連はセルビア制裁を決議するに至る[19]。国連保護軍に大きな兵力を送った英・仏は、それに派兵していなかった米国の空爆案には消極的であった[20]。

米軍主導のNATO軍によるセルビア人に狙いを定めた限定的空爆は、1994年4月から同年11月まで6度を数えた[21]。その結果一時的な停戦は実現したものの、停戦はほどなく失効したため、'95年5月に再開されたNATO軍による空爆は同年9月までに3000回を越える激烈なものとなった[22]。それに対してセルビア勢力は、国連保護軍の人質を「人間の盾」にしたことによって国際世論の憤激を買った。また、'95年7月にボスニア・ヘルツェゴビナ西部のスレブレニツァをセルビア勢力が占領したときには、5000人以上の住民が虐殺されている[23]。

Ⅲ．大石芳野の見たコソボ

先述のように、1998年3月には、コソボ解放戦線（KLA）とセルビア勢力との内戦が激化していた。当時コソボのセルビア系住民は人口の1割に満たない18万人だった。ところが人口の9割を占めていたアルバニア人は、警察や軍隊といった組織をもともと持っていなかった[24]。それどころか、セルビア系住民の「保護」を謳うミロシェビッチによって、アルバニア系住民は役所や大学や企業からすら追放されていたのである[25]。KLAの襲撃地にはセルビア警察も含まれていた[26]。

1999年3月に米軍主導のNATO軍によってセルビア空爆が開始されて間もない頃、大石芳野はギリシャのテッサロニキ空港に降り立ち、そこから車でマケドニアに入国した。マケドニアの首都、スコピエの空港は、NATO軍専用の飛行場と化していて、民間機の発着は停止されていたのである[27]。大石の利用したタクシー運転手のマケドニア人は、セルビア空爆に反対していたという。道すがら、やはり空爆に反対するギリシャ人たちにも遭遇している。当時マケドニアには、コソボ難民キャンプが国内の9か所に設けられていた[28]。マケドニアは多民族・多宗教国家といえ

るが、総人口の3割強をアルバニア人が占めていた。この初回の渡航では、大石の取材はマケドニア内のコソボ難民キャンプにとどまっている。

セルビア空爆が終わり、難民たちがこぞってコソボに帰省し始めた1999年の夏、大石芳野はコソボを訪れる。自治州としての州都だったプリシュティナは、セルビア勢力によって撒かれた大量の地雷により一部立入禁止となっていた[29]。600年にも及ぶ長きに亘ったオスマン・トルコによる支配の名残をその景観に色濃く留める古都プリズレンは、すんでのところで破壊を免れていた[30]。大石による笑顔の子どもたちのショットがあるスタノヴツ村には、アルバニア系のほかセルビア系、ロマ系、そしてカフカスからの移住者のチュルケス系の人々が混住していた。アルバニア系および彼らと親しくしていたロマ系の住人が襲撃されたという[31]。

アルバニア人はオスマン・トルコの侵攻以前にはその多くがカトリックであった。支配が続くにつれて、イスラム教徒が多数を占めるに至る。大石芳野がマケドニアでの体験から述べているように、ギリシャ人やマケドニア人の中にセルビアへの同情が見えるのは東方正教の繋がりからかもしれない。だが、現在のアルバニア人の中には今なおカトリック教徒もいれば、東方正教徒も存在し、それがセルビア勢力によって無差別に攻撃された理由は、民族がアルバニア系であること以外にはなかった。大石がコソボを「民族浄化」の一例と見なす所以である[32]。ナチス・ドイツによるユダヤ人ホロコーストを連想させずにはいない「民族浄化」の思想は、しかしその一方で「民族自決」という理念からの帰結でもありうると柴宣弘は述べている[33]。もし「民族自決」が尊重されるべき理念であるとすれば、ある地域の少数者たちの「民族自決」要求も尊重されねばならない。複数の民族の混住する地域でその要求が認められるならば、限りなく小さな「国民国家」が誕生することになる。だがむしろ問題であるのは、そのプロセスの中で、民族的同質性を求めて「異質なるもの」を排除して行く傾向が「民族浄化」の発想に繋がりかねないことである。複数の民族の混住地域における「民族自決」の十全なる徹底は不可能であろう。大石芳野が述べるように、日本人は「民族浄化」の加害者と被害者双方の立場を遠くない過去に経験した[34]。すなわち、日本人は関東大震災時において朝鮮人に対して加害者であったし、太平洋戦争時において米国に渡っていた移民は被害を被った。加害および被害を防止するためには、複数の民族が共存の知恵を育んでその混住地域を維持して行く以外の方途はないだろう。おそらく大石は、日本がその方途を示す国のひとつとして寄与しうることを望見していよう。

大石芳野は世界各地の数多くの現場で、無数の人々を撮影してきた。被写体が特に高齢者の場合など、モノクローム・フィルムを用いた撮影で、その陰影の深い階調が人物に威厳を感じさせることも多い。『コソボ　破壊の果てに』や、土門拳賞を受賞した前作『ベトナム凛と』では、子どもの被写体が多いことも与って、カラー・ポジが素晴らしい効果を収めているといってよい。大石は、子どもの温もりのある環境の一部になれればと願って彼らを訪ねるという。しかし取材は無情な仕事であり、カメラが非情な道具であることは、大石も苦にしているとおりであろう[35]。彼女の写真作品から感じられるのは、子どもが食べ物や玩具を手にしていたり[36]、写真家が光線や背景を考慮したりすることで、被写体が少しでも明るい気持ちでいるようにしていることである。そういった作品からも、大人や社会は子どもの平穏な心の成長のためにこそ存在している、という大石の信念が窺われるのではないか[37]。大石芳野の二つの写真集の棹尾付近に配された作品には、コソボの「破壊の果て」にあるものが決して「絶望」ではないことを願う思いが込められている[38]。

先に大石芳野らのコソボでの仕事に対して、NATO軍によるセルビア空爆是認の後押しとなるのではないかという危惧があったことに触れた。

しかし大石も、セルビア空爆が（国連その他の）承認を経たものでないことを懸念していたのはいうまでもない[39]。外国の軍隊による平和がその地に真の平和をもたらしはしないことを、大石芳野ほど知る者は多くはないはずだ。次章では、米軍主導のNATO軍によるセルビア空爆に反対したふたりの識者の見解を検討する。コソボ紛争を、ユーゴ全域あるいは現代世界の状況全体の中に位置づけるためにも、その作業は欠かせないものであろう。

Ⅳ．反空爆の視点と論理

（1）ペーター・ハントケ

ペーター・ハントケ（1942-）は、ノーベル文学賞候補にも取りざたされるオーストリアの作家であり、ヴィム・ヴェンダース監督による映画作品「ベルリン 天使の詩」（1987年）の脚本作者として一般にもよく知られている。ハントケはスロベニア人の母をもち、その出生地はスロベニアと国境を接するオーストリアのケルンテン州である。元吉瑞枝によれば、ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争時、1994年から翌'95年に実施された米軍主導のNATO軍によるボスニア内のセルビア人に対する空爆以来、ハントケはユーゴを母国と考えるようになっていた[40]。ドイツ語で執筆する作家でありながら、早い時期からセルビア制裁を主張しEUやNATOの方針決定に最も責任のあったドイツに対して、ハントケは批判的な立場を採っている。彼は'99年の3月および4月に、二度に亘って空爆下のユーゴに現地視察の旅に出た。その旅行記が物語る「反空爆」の視点を追うことにしよう。

旧ユーゴから当時のユーゴスラヴィア連邦共和国に至るまで同国の首都であったベオグラードにハントケが差し掛かったとき、道路の随所で彼の目に映ったのは、廃棄された車のタイヤが黒煙を上げて燃やされている光景だった。セルビア勢力に対するNATO軍のいわゆる「アライド・フォース作戦」では、米海軍のミサイル駆逐艦等からトマホーク巡航ミサイル弾が撃ち込まれた。そのトマホーク弾のレーダー・システムを狂わせるべく、大量の煙幕が黒々とたなびいていたのである[41]。

ベオグラードの「ホテル・メトロポール」にハントケが滞在した日数はごく短い。しかし、ホテルの一室で体験した彼の「空爆」の記述は極めて生々しい。空爆は「急に」とか「突然に」といった言葉さえ間延びしているように感じられるほど唐突にやって来る、というのである[42]。慣れることは全く不可能で、子どもも大人も吃りにならざるを得ない、と彼は続けている。

短期の滞在とはいえ、空爆されるセルビアの現地取材としてハントケの証言には大きな意味が認められよう。例えば彼は、セルビア国営放送局への爆撃で、11人の従業員が死亡したことを伝える[43]。そのうちのある者たちは、チェホフについてのTV番組を制作中だったという。また、南セルビアのスルドリツァでは住宅地が爆撃され、防空用の地下室で20名以上の犠牲者が出たという。

邦訳書では副題とされているが、ハントケの著書は「涙の下から問いかける」という原題をもつ。それは彼がノヴィサイドの病院で腫瘍専門医の女性に出会ったとき、「こんな苦しみを受けるからには――罪があるに違いありません。でもどんな罪が？なぜ？」と彼女が涙の下から問いかけた、というエピソードに由来している[44]。

空爆には「二次被害」とでも呼ぶべきものもある。爆撃機が不使用の爆弾を積んだまま基地に戻ると、着陸の衝撃でそれが爆発しかねない。NATOはアヴィアーノ基地への帰途に通過するアドリア海に、6か所の不使用弾投棄海域を設けていたが、それらの爆弾の爆発によって漁民が大きな被害を被っている[45]。

（2）ノーム・チョムスキー

1991年に設立されたコソボ解放戦線（KLA）

による武力行使の拡大に対して、セルビア勢力が掃討作戦を開始するのが'98年2月のことであった。両者の衝突の拡大を危惧した国連安全保障理事会（以下、「国連安保理」と略記）は、同年9月にコソボ停戦を求める決議を採択し、翌10月に両勢力によって停戦が合意される。しかし12月にはセルビア勢力が攻撃を再開し、KLAも停戦を破棄するに至る。

1999年2月、当時のNATO事務総長ハビエル・ソラナの仲介により、フランスのランブイエにてセルビア勢力とKLAとの和平交渉が開催されるが、翌3月にはユーゴのミロシェビッチ大統領がNATO主導の多国籍軍によるコソボ駐留という和平案の条項を拒否し、同月24日にNATO軍によるセルビア空爆が開始される。この爆撃は国連の決議を経ないものだった。同年6月、ユーゴは和平案を受諾する。

以上の経緯において、ノーム・チョムスキーが当時のニューヨーク・タイムズ紙の記事を援用して強く批判するのは、時の米国クリントン政権が、NATOの軍事行動が国連に対して独立的に遂行可能であることに固執し続けた点である[46]。米国が国連加盟国の中で最大の影響力をもつという構図は続くかもしれないが、米国が確固とした主導権を有するNATOが、国連とは独立した力を行使してよいはずはない。チョムスキーによれば、ニューヨーク・タイムズ紙の記事の見出しは、「コソボ交渉の最大の意見の相違は列強間に」というものであった。例えば、全欧州安全保障協力機構（OSCE）監視員の配備について、欧州諸国は国際法に則って国連安保理の承認を求めようとしたが、米国の強硬姿勢は崩せなかったというのである。

コソボの地で、セルビア勢力による「民族浄化」が行なわれようとしたことは事実であろう。しかしチョムスキーによれば、1999年5月発行の米国国務省報告書で具体的に記述されているセルビア勢力による残虐行為は同年4月4日以降となっており、NATO軍によるセルビア空爆に対する反応と考えることが可能であるという[47]。当時の国連事務総長コフィ・アナンは、同年9月の国連年次報告の中で、NATOの行為は国連憲章が司る「国際安全保障体制の核心」に対する脅威であったと述べている。20世紀初頭以来「欧州の火薬庫」と呼ばれてきたバルカン地域に対する覇権を、米国は少なくとも一時的には欧州から奪ったはずである。米国が、自ら主導権を握るNATOによる軍事作戦を展開しようとした第一の理由がそこにあることは、チョムスキーの指摘するとおりではないか[48]。

(3)「空爆」という攻撃手段

コソボ紛争の最終的局面では、国連の未承認のうちにNATOの独断専行によって実施された空爆が、セルビアの死命を制する結果をもたらした。国際紛争の調停における主導権のありかは、当然に法的な問題であろうが、さらにそれとは別に、「空爆」という攻撃手段の是非が考えられねばならないだろう。

1937年にベオグラードに生れた米国の哲学者トマス・ネーゲルが、おりしもベトナム戦争の泥沼化していた1971年に発表した「戦争と大量虐殺」というよく知られた論文がある。ネーゲルは戦争を現実と受け止めるとき、認めるほかはない攻撃の対象と攻撃の方法についてその論文で考察している。より正確に言うならば、決して認められない攻撃の対象と方法について、獲得されるべき否定的合意（negative consensus）の条件を考察している。

ネーゲルによれば、攻撃されてはならない対象は非戦闘員である。子どもや大部分の女性は明らかに非戦闘員であるが、農民や食糧生産者、そして軍隊の調理師や軍医すらそこに含まれる。戦闘員が、兵士としてでなく、人間として必要なものを供給する者たちは非戦闘員なのである。したがって、それとは異なり戦闘員の兵士としての側面に求められるものの供給者―軍需工場の労働者など―は、戦闘員に準ずるものと見なされるので

ある[49]。

明らかな戦闘員に対してであれ、過度に残酷な兵器、例えば餓死や中毒や重度の火傷や感染症をもたらす兵器は使用禁止とされるべきであるとネーゲルは主張する[50]。核兵器をはじめ、化学兵器、生物兵器、火炎放射器、ダムダム弾、ナパーム弾などがこれに該当しよう。ネーゲルは述べていないが、空軍兵同士の空中戦はともかく、私は「空爆」という攻撃の仕方は少なくとも極限まで制限されるべきではないかと考える。広島と長崎の原爆被害は空爆によるものだったが、軍用機に搭載される爆弾の種類・性質を問わず空爆そのものが可能な限り制限されるべきではないか。その理由は、対象を戦闘員のみに限定可能な空爆というものは考えにくいからである。

Ⅴ．今後の展望

コソボは2008年2月、プリシュティナを首都とする「コソボ共和国」としてセルビア共和国から独立を宣言し、翌3月には日本もその独立を承認している。'14年には国際五輪委員会（IOC）によって五輪参加権を承認され、'16年8月のリオデジャネイロ（ブラジル）五輪において、女子柔道の選手が金メダルを獲得して話題になった。大石芳野の取材の前後に通貨はユーロとなったが[51]、EUへの加盟は2015年末の時点で未承認である。

2015年末の時点において、コソボは国連、EU、NATOに加入を望みながら果たせず、ボスニア・ヘルツェゴビナはEUおよびNATOに加入し得ていない。それらに反対する国々が一定数あることからも窺えるように、バルカン半島の旧ユーゴ内の複数民族混住地域の問題は決して過去のものとはなっていない。

1995年7月のスレブレニツァの虐殺当時現地に滞在し、事件前の同年3月には、虐殺の最高責任者とされるラトコ・ムラディチ（当時はボスニア・ヘルツェゴビナ・セルビア人共和国参謀総長）と面談もしている長有紀枝は、2016年7月にスレブレニツァを再訪している。長によれば、ジェノサイドから21年が経過した今なお、ボスニア・ヘルツェゴビナでは「民族共存」などといった言葉を軽々しくは口にできない険しい空気を感じたという[52]。

しかしその一方で長有紀枝は、一筋の光明も見出したようだ。それはスレブレニツァの地で、現地人の運転手とともに集団墓地を訪れるべく道を尋ねた際に、年配の女性に、行こうとしている集団墓地はセルビア人のものかムスリム人のものかと険しい表情で問われたときのことだという。若い運転手はそれに対して、すべての集団墓地を探している、自分はユーゴスラヴィア人だから、と答えたのである。自らをユーゴスラヴィア人やボスニア・ヘルツェゴビナ人と規定する人々を身近に見たことは、長に将来への一縷の望みをかけさせたようだ。

最後にあらためて大石芳野の作品の意味を考えたい。コソボのみならず大石が足を踏み入れた係争地における主要な被写体は子どもである。大石のレンズは、何ら落ち度のない子どもを、大人社会のエゴイスティックな反目によって犠牲にすることの痛ましさを闡明して間然するところがない。そしてその一方で、社会に未来の展望を与えるのも子どもであることを指し示しているのが、大石芳野の写真作品の真髄なのである。

註

1）初出は『季刊写真映像』第9号（1971年）。この雑誌を桑原甲子雄らと編集・制作していた吉村伸哉が、『来ればよいのだ春などは』の巻頭に、「大石芳野さんのこと」という一文を寄せている。それによれば大石は、この写真集に収められた連作以前に、「パパニー」という連作を、1971年2月に「ニコン・サロン」において個展の形で発表している。「パパニー」は、日本人の若い女性とひとりの黒人の少年との交友を、アフリカの大草原を模した風景の中でフォト・ポエジー風に描いたものであったという（大石芳野、『来ればよいのだ春など

は』、深夜叢書社、1973年、1頁)。
2) 大石芳野、鶴見和子、『魂との出会い』、藤原書店、2007年、131頁。
3) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、講談社、2002年、102頁。
4) 同上、13頁。
5) 同上、16頁。
6) 木村元彦、『終わらぬ「民族浄化」セルビア・モンテネグロ』、集英社新書、2015年、246頁。なお、当時コソボで取材した著名な写真家には、大石のほか長倉洋海らもいた。
7) 柴宣弘、『ユーゴスラヴィア現代史』、岩波新書、1996年、207頁。なお、ここでいう「ムスリム人」は、「アラビア圏のイスラム教徒」や、イスラム教徒の多い「アルバニア人」などと区別して、15世紀に侵入し、19世紀までその支配が続いたオスマン・トルコの影響によって「イスラムの宗教や文化を継承しているセルボ・クロアチア語を話す南スラブ人の末裔」を指している。1971年以降、ユーゴにおいてはセルビア人、クロアチア人と並ぶ主要三民族のひとつを成している（ペーター・ハントケ（元吉瑞枝訳)、『空爆下のユーゴスラビアで』、同学社、2001年、179頁以下の訳註による)。
8) 同上、iv頁。
9) 同上、64頁。
10) 同上、160頁。
11) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、166頁。同、『コソボ　絶望の淵から明日へ』、岩波書店、2004年、57頁。
12) 柴宣弘、前掲書、149頁。
13) 同上、153頁以下。
14) 同上、211頁。
15) 同上、i頁および178頁以下。
16) 同上、186頁。
17) 同上、182頁。
18) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、170頁。
19) 柴宣弘、前掲書、178頁以下。
20) 同上、194頁。
21) 同上、195頁。
22) 同上、198頁。
23) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、184頁。スレブレニツァは1995年7月まで、ボスニア・ヘルツェゴビナ東部のセルビア人地帯に囲まれたムスリム人の飛び地で、国連保護軍に守られた国連安全地帯に指定されていた。セルビア勢力によって陥落させられたことにより、セルビア側によるムスリム人受難の象徴の地となったが、その一方で、それ以前の当地でのセルビア人側の被害はほとんど報道されていなかった（ハントケ、『空爆下のユーゴスラビアで』、181頁の訳註による)。さらに詳細は、長有紀枝、『スレブレニツァ』、東信堂、2007年、を参照のこと。
24) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、166頁以下。
25) 同上、189頁。
26) 大石芳野、『コソボ　絶望の淵から明日へ』、57頁。
27) 同上、55頁。
28) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、170頁。
29) 同上、111頁。
30) 同上、158頁。
31) 同上、122頁。ロマ人の被害については、大石芳野、『コソボ　絶望の淵から明日へ』、33頁に、アルバニア人と親しかったためにセルビア人から襲撃された家族の写真が収められている一方で、32頁には、セルビア人と親しかったためにアルバニア人から襲撃された家族の写真も収められている。
32) 同上、184頁。
33) 柴宣弘、前掲書、212頁。
34) 大石芳野、『コソボ　破壊の果てに』、190頁。
35) 同上、183頁。
36) 同上、116頁には葡萄を手にしている子どもたち、98頁および112頁には人形を手にしている子どもたち、119頁にはスキーに興ずる子どもたちの写真が収められている。
37) 同上、181頁。
38) 同上、164頁では、校舎の割られた窓の向こうに、子どもの笑顔が陽光に輝いている。『コソボ　絶望の淵から明日へ』44頁では、回復の途上にある緑豊かな牧歌的光景が謳われている。
39) 同上、187頁。
40) ハントケ、前掲書、87頁以下の訳註による。
41) 同上、153頁。
42) 同上、164頁。
43) 同上、166頁以下。
44) 同上、171頁。
45) 同上、184頁の訳註による。

46）ノーム・チョムスキー（益岡賢、大野裕、ステファニー・クープ訳）、『アメリカの「人道的」軍事主義』、現代企画室、2002年、170頁。
47）同上、138頁。
48）同上、270頁。
49）トマス・ネーゲル（永井均訳）、「戦争と大量虐殺」（ネーゲル、『コウモリであるとはどのようなことか』、勁草書房、1989年に所収）、112頁以下。
50）同上、114頁。
51）大石芳野、『コソボ　絶望の淵から明日へ』、68頁によると、ユーロ移行前のコソボのアルバニア系の人々の預金の多くはドイツ・マルクだったという。
52）長有紀枝、「スレブレニツァで考えたこと」、（『世界』2016年10月号、岩波書店に所収）、111頁。